

さ、歯喉角、歯背角並びに歯背線の型等によって制限されるため例外を除きバラツキは比較的少ない。

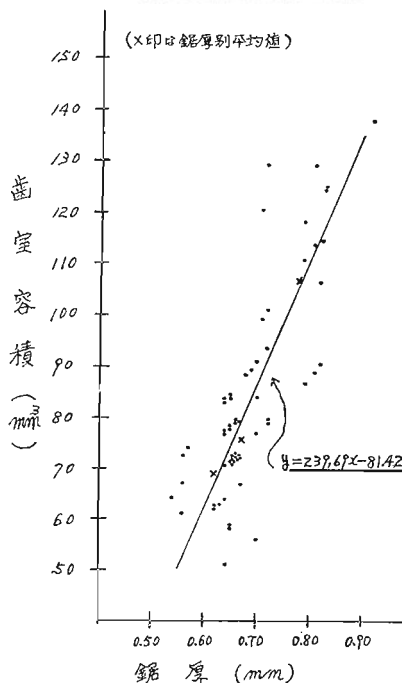
(G) 鋸厚と歯室容積との関係

鋸厚を横軸、歯室容積を縦軸にとって実測した歯室面積に鋸厚を乗じて求めた歯室容積を黒点で表しバラツキをみたのが第10図である。比較的バラツキが少なく鋸厚に比例する傾向が察知できる。この大きさは、鋸屑の抱擁力に関係し、歯室容積が大きい程大となり鋸屑が順調に排出され、切削中材面に残存する鋸屑の量が少なくなり、鋸の加熱現象を防止し切削力が高まる結果となる。しかしながら歯室容積の大小にかかわらず、アサリの大きさが決められる場合が多いのであるがアサリの大きさは、鋸屑の発生量に関係するので、歯室容積の可否をみる場合当然考慮しなければならない因子である。

第10図で理解できるとおりバラツキが比較的小さいのは、歯室容積の大きさを決定するピッチの大きさ、歯底の深さ、歯背線の型等は、最終的に歯室容積を左右するものであり、鋸屑の排出に必要な容積を保持していればよいのである。しかしながら、極端に過ぎることがあれば、不必要な容積となったり、歯先の強度を弱めたり、鋸割れの主因となり、アサリの大きさを

制限する結果となって切削力を減退する。

第10図 鋸厚と歯室容積との関係



101. 林学研究論文の整理について

九・大 稲 古 克 明

ここに述べるのは、研究というより希望を述べるにすぎぬ。戦後刊行物発刊数のおびただしさは御存じの通りである。1959年中に発行された単行本の種類（発行部数ではない）は日本だけで24,983種。フランス、ドイツ、アメリカ、インド、イタリア、イギリス本国、ソ連、中共、日本を併せると201,792種、一種1,000部の印刷と仮定しても、201,792,000冊となると報ぜられている。（日本図書館協会、ドキュメンテーション、1961年版）

単行本でさえこの通りであるから、研究論文の数は推して知るべきである。

日本農学進歩年報第10号（日本学術会議、1963）所載の林学関係研究論文の数は1,297である。Forestry Abstracts Vol. 23、(1962)で集計してみると（之

は1961発表のものを主とし、1958~1960のものも多少含んでいる）Subject の数で 4,599、この内日本人のものは208（約4.3%）であり、Authorは5,957人で、この内日本人が217（約3.6%）である。

研究に要する時間中、文献探索に費される時間は相当なものであろうが、研究者にとって、これは出来る限り短縮したいものであることはいうまでもないことである。

近年の科学技術の急速な進歩に伴い、研究論文の整理、情報提供の必要から Documentation ということがさかんに称えられるようになった。特許関係の文献探索の必要上などから、会社の研究所などでの発達は大学を凌ぐよう察せられる。

文献整理には、その分類が最も必要なことである。

北大名誉教授今田敬一氏は、日本林学会誌第17巻(1935)に「林学図書分類法に就て」と題して、その歴史と必要性を説いておられる。

1700年代から各種の林学文献分類法が試みられたようであるが、権威あるものとしては、1903年 Wien で開かれた The International Union of Forest Research Organization-I U F R O (前身は1893年創設された The international Association of Forest Research Institutes で、1929年改名さる) の第4次大会で、Bibliographical Committeeが常設されたことであろう。

この Committee は1933年に、当時としては完全と思われる林学文献分類型式を作った。この仕事に最も功績のあったのはスイスの林学者 Dr. Philipp Flury であったので、この分類型式は公的には「Forest Bibliography」となっているが一般には「Flury System」として知られているとのことである。

Melvil Dewey (1851~1931, Decimal Classification の創案者で D C の初版は 1876 年に発表さる) の D C を基準にしたものであるが、D C や UDC (1895年ブラッセルで開かれた国際書誌学会— Institut Internationale de Bibliographie— I I B、改名して現在は Fédération Internationale de Documentation— F I D で D C の体系をこわさず国際的に改修されたものの英国版) が林業を 634.9 という細分類の展開範囲の狭いものとしていることを不満として、特に 634.9 F という特殊の分類型式が試みられたのである。

Flury System が公表された後も、林学の進歩はこれが改修を必要とし、度々の集會討議による改修が行われたが第2次世界大戦で討議は中断された。

戦後第一回の Bibliographical committee は1948年 Zürich で開かれたが、この committee に Oxford の林野庁長官 (Director of the Commonwealth Forestry Bureau at Oxford) F. C. Ford Robertson 氏から完全に改修されたものが提案された。

IUFRO は国際的に書誌 (即ち、文献蒐集、分類、文献カード又は抄録カードの頒布、年次索引の発行等々) 計画を推進するために、F A O (The Food and Agriculture Organization of United Nations) に働きかけ、両者から委員を出して合体の Bibliographical committee を創設する提案をして其賛同を得た。

この合体 committee の初回は1949年 Helsinki で開かれ、1950~1953の間に Oxford, The Hague, Wageningen, Rome. で開かれている。

1953年 Rome で開かれた IUFRO の會議に提出された英語版のものを Oxford System of Decimal Classification for Forestry といっている。

併しこの Rome での委員会の決議中の Requests の一部に、UDC に完全に合体する新しい型式のものを案出する努力を続けるということを書いている。之は UDC は数字標示で文字を用いないのが建前になっているので Oxford System のように「F」という文字を用いたものは特例的のものであるからである。

米国では、The committee on Forestry Education で1919~1923の間研究を重ねて、1923年に General Classification of Forestry Literature を発表している。(An outline for the classification of Forestry Literature— Journal of Forstry Vol. XXI 1923)

之は今田博士も米国に偏しすぎていると評している。

林学文献分類の歴史の大雑把な請究を記したが、我国林学界でも文献整理の基礎となる分類型式を確立してもらいたいと思うのである。大学の記要、学芸雑誌、演習林報告、林業試験場の研究報告、林学会雑誌等比較的高度のものは国際的のものとして Oxford System の分類によるとしても、国際的とまでゆかない当支部講演集の如きものはいかなる分類を用いたがよいか。

農学進歩年報の林学文献分類型式はどういう経緯からできたものであるか知らないが、当支部の講演集の如きはこれによってよいか、又は NDC (日本十進分類法) によるがよいか、或は他にもっと適切な分類型式があるのであろうか。林業試験場年報 (昭和36年度、38・3・15) にも或る程度展開できる分類型式が採られている。

林学会誌、演習林報告等の論文 Title に欧文をつけ、又 Synopsics, Summary を欧文でつけるのは国際性をもたせるためであろうが、近い将来林学の主要文献にも編集者—進んでは著者自らが UDC (Oxford System) をつけることにするとよいと思う。尤も UDC は日本語版が完備しておらず、又これを理解するには相当の努力を要すること、と思う。併し既に文献に UDC の符号をつけて編集されている刊行物も沢山あり、個人でこれによって文献整理を行っている人も多いようである。

農学進歩年報の発刊は學術會議第6部会の大きい功績であろう。年報の前身総報の第1号 (1952) を発刊するには其関係者はいかにばかり大きな困難を克服され

たものであろうかと察せられる。これの編集委員会は FID に加盟しているものかどうか知らないが、大いに拡充強化してもらいたいものである。

林学会誌も41巻を迎えた。各大学の演習林報告もおびたゞしい発刊部数である。之等の総括的整理の必要性を感じていたが、たまたま「遺伝学雑誌総目録と索引」のあるを知った。これは 1956 年我国で開かれた International Genetics Symposia に関にあうよう、第1巻 (1921) — 第30巻 (1955) をまとめ、1956年に発刊されたものである。林学会誌や各大学演習林報告にもこのような図書の発刊が望ましいものである。

仮に 1 人の研究者が 1 研究題目のため文献探査に費す時間を 10 時間とすれば、1 万人の研究者では 4,166 余日となる。

関東大震災の復興院総裁後藤新平氏の「大風呂敷」が実現していたなら東京都が今日の交通麻痺を嘆くことはなかったかも知れない。

#### 参 考 文 献

- 1、ドキュメンテーション 1961 日本図書館協会
- 2、日本林学会誌 Vol.17—P.731(1953)  
日本林学会
- 3、日本農学進歩年報 (総報)  
第 1—10 1952—1963  
日本学術会議
- 4、遺伝学雑誌総目録と索引 1956 日本遺伝学会
- 5、Forestry Abstracts Vol.23 1962  
Commonwealth Agricultural B-  
ureaux, Farnham Royal, Engla-  
nd
- 6、The Oxford System of Decimal  
Classification for Forestry, Authorized  
English Version 1954 同上
- 7、Journal of Forestry Vol. XXI 1923  
Society of American Foresters